利休と遠州

薄田泣菫

一

むかし、堺衆の一人に某といふ数寄者がありました。その頃の流行にかぶれて、大枚の金子を払つて出入りの道具屋から、雲山といふ肩衝（かたつき）の茶入を手に入れました。太閤様御秘蔵の北野肩衝も、徳川家御自慢の初花肩衝も、よもやこれに見勝るやうなことはあるまいと思ふにつけて、某はその頃の名高い茶博士から、何とか折紙つきの歎賞の言葉を得て、雲山の誉れとしたいものだと思つてゐました。

機会は来ました。ある日のこと、某は当時の大宗匠

千利休を招いて、茶会を催すこととなりました。

かねて主人の口から、この茶入について幾度ならず吹聴せられてゐた利休は、主人の手から若狭盆に載せられたこの茶入を受け取つてぢつと見入りました。名だたる宗匠の口から歎美の一言を待ち設けた主人の眼は、火のやうに燃えながら、利休の眼を追つて幾度か茶入の肩から置形（おきがた）の上を走りました。

あらゆる物の形を徹（とほ）してその心を見、その心の上に物の調和を味はふことに馴れてゐる利休の眼は、最初にちらとこの肩衝を見た時から、この茶入の持つ心持がどうも気に入らなかつた。しかしできるだけその物

の持つてゐる美しい点を見逃すまいとする利休の平素(ふだん)からの心掛けは、隠れた美しさを求めて、幾度か掌面(てのひら)の茶入を見直さしました。肩の張りやうにも難がありました。置形にも批の打ちどころがありました。一口に言へば衒気(げんき)に満ちた作品でした。

利休は何にも言はないで、静かにその肩衝を若狭盆の上に返さうとしました。その折でした。利休が自分に注がれた主人の鋭い眼付きを発見しましたのは。その眼には驕慢(けうまん)と押しつけがましさとが光つてゐました。利休はその一刹那に、主人の表情に茶入の心持を見てとりました。茶入の表情に主人の心持を味はひました。

主人は得意さうに利休の一言を待ち構へてゐました。利休は何にも言ひませんでした。狭い茶室はこの沈黙に息づまるやうに感ぜられました。

湯はしづかに煮え沸(たぎ)つてゐました。主人の顔からはいつのまにか押しつけがましさが消えて、物を頼むときのやうな弱々しい表情が見え出しました。利休は眼ざとくそれを見て取りましたが、何事にも気のつかない振りをしてゐました。いつだつたか、利休は前田玄以(げんい)の茶会で、主人の玄以が胴高(どうたか)の茶入を持ち出してきて、

「この肩衝が……」

と、茶入の胴高なのに気がつかないで、しきりと肩衝を繰り返して、利休の意見を聞きたがつてゐるのに出会つたことがありました。利休はいまさらそれを胴高だと教へもならず、をかしさをこらへてただ黙つてゐると、それがひどく玄以の機嫌を損じたかして、その後はうばうで自分のことを悪様（あしざま）に言ひふらし、果ては太閤殿下にまで讒訴（ざんそ）を試みてゐるといふことを聞いてゐるので、こんな場合の沈黙が、どうかすると自分の一身にとんでもない災難をもたらさないものでもないことをよく知つてゐました。しかし自分はこの道の宗匠である。自分の一挙手一投足は長くこの道の規範と

して残り、自分の一言は器の真の価値を定める最後の判断であるのを思ふと、滅多なことは口に出せませんでした。利休はただ黙つてゐました。

茶がすんで、利休が席を退くと、その少し前からやつと気持の平静を取り返したらしい主人は、雲山の肩衝を手のひらに載せて、しばらくぢつと見とれてゐましたが、いきなりそれを炉（いろり）の五徳に叩きつけました。茶入は音をたてて砕け散りました。

「何をなされます、こんな名器を……」

席に居残つて、何かと世間話に興じてゐた二人の相

客は、びつくりして主人の顔を見つめました。
　主人はそれには何も答へないで、静かに羽箒（はばうき）を取つてそこらに飛び散つた挽茶（ひきちや）の細かい粉を払つてゐました。
「何をそんなにお腹立ちで、こんな名器をお毀（こは）しなされた」
　二人の客はいくらか不興げな顔をして、腑に落ちなささうに訊きました。
「いま時利休が賞め言ひとつ申さぬものを……」主人はどうかすると興奮しさうになる自分の心を、強ひて抑へつけるやうに、一語一語力を籠めながら、ぼつり

ぽつりと息を切つて言ひました。

「賞め言ひとつ申さぬものを秘蔵したとあつては、末代までの恥辱でござるからな」

誇りを持つた主人の言前（いひまへ）に、二人の客は顔を見合せて口を噤（つぐ）むよりほかには仕方がありませんでした。急に茶室のなかが薄暗くなつたかと思ふと、時雨がはらはらと軒の板庇を叩いて通りました。

「御主人……」しばらくしてから客の一人が口を切りました。「少し趣向もござれば、その茶入の破片は拙者において所望いたしたい」

「最早手前には無用の品、どうか御随意になされます

やう」

主人はほがらかな気持で答へました。その客は静かに炉縁ににじり寄つて、灰のなかから茶入の破片をこくめいに拾ひ上げました。

時雨はいつか通り過ぎたかして、室のなかはまたぱつと明るくなつてきました。

二

雲山肩衝の破片を拾ひ集めた茶人の手で、間もなく茶会がまた催されました。

客の一人としてその席に招かれた利休の顔は、若狭盆に載せられた肩衝の茶入が眼につくと、驚きの色で輝きました。それはばらばらに幾つかに毀れたのを、無雑作に継ぎ合せたもので、なかには破片と破片とが互ひに入違ひになつてゐるところもあつて、誰の眼にも素人の手で繕はれたものとはすぐに見別けられました。

が、利休の驚いたのは、この席で疵（きず）入りの肩衝を見つけたからではありません。その茶入が紛（まが）ふ方もなく、ついこなひだ堺衆なにがしの茶席で見かけた雲山そのものだつたからでした。それに気がつくと同時に、利

休の眼の前には、驕慢と押しつけがましさとで火のやうに燃えてゐたその持主の顔が描き出されました。

「たうとう割りをつたな」利休は心のなかでさう思ひました。「大抵の者ならば、割るよりもまづ売るはうを考へたらうにな」

利休はしづかに盆の上から茶入をとりあげました。そして初めて気付いたもののやうに言ひました。

「ほう、これはいつぞやの雲山でござるな」見ると素人の手でへたに繕はれただけに、茶入には以前の衒気は跡方もなく消えてゐました。利休にはそれが以前の持主の名器に対する執着の抛擲（はうてき）のやうにも見えました。

利休は独語のやうに言ひました。「これでこそ、結構至極ぢや……」

三

「利休が結構至極と折紙をつけたさうな」

この評判は、たちまちその頃の茶人たちのなかに拡がりました。そして前にはこれを見て何ひとつ言はなかつた利休に、結構至極と折紙をつけさせるやうになつたのは、茶入の割れ目を繕つたその無雑作加減が、茶道の極意にかなつたからだと噂されました。

「こんな名器を貰ひ徳にしておいては、茶人冥利につきまいものでもない」

かう思つた持主は、その肩衝を持参して、訳を話して以前の持主に返さうとしました。以前の持主は強くかぶりをふつて、

「うち砕いて土に戻した雲山に、またぬぐりあはふなどとは思ひもかけませぬことぢやて」

といつて、てんで相手にもしなかつたさうです。

「利休が結構至極と折紙をつけたさうな」
この評判は器の値打をだんだんとせり上げました。疵入の雲山は数寄者から富豪へ、富豪から大名へと、次々に譲渡されて、最後にすばらしい値打と評判とをもつて、ある東国の大名の手に納まりました。
それを聞きつけたのが、その頃丹後宮津の城主であつた京極安知でした。安知は茶器のためだつたら自分の家来はいふまでもないこと、ただひとつしか持つてゐなかつた小さな魂をも売るのを厭はないといつた性（たち）の大名でした。
「雲山が所持したい。あれさへ所持できたなら、茶入

の望みは生涯またと持つまいに」
　安知はかう言つて、しみじみと歎きました。そして病気にさへなりました。その容態を看るべく京極家に迎へられた某といふ医者は、安知の病気が自分の持合せの医薬では、とても治らないことを見てとりました。そして別の医療法をとることに決めました。別の医療法といふのは、
「欲しがるものは与へる」
といふことでした。医者は雲山肩衝の今の持主である東国の大名にも出入りを許されてゐましたから、早速その旨を通じました。

「京極侯には、雲山を所望して病気にまで罹られたとか。それはお気の毒なことぢや。さやうに所望せらるれば遣はさないものでもないが、あれは利休も結構至極と賞めた当家秘蔵の品ぢやによつて、金二駄を少しでも欠いでは……」

その大名はかう言つて笑ひました。この人は京極安知よりも、人間が少し賢く生れてゐましたから、頭から拒ねつけないで、金二駄ならば相談に乗つてもいいと答へたのです。金二駄と言へば一万二千両ですから、小藩の京極家では指をくはへて引つ込むよりほかには仕方があるまいといふ腹なのでした。しかし、ものに

溺れやすい安知には、そんな銭勘定を飛び越すくらゐは何でもなかつたのです。医者から事情を聞いた彼は、

「利休の賞め立てた品ぢや。金二駄は安からうて」

といつて喜びました。案に相違したのは東国の大名です。この場合唯一の方法は、

「あれは戯談(じょうだん)ぢや」

と逃げを打つことでしたが、大名といふものは、仮にも戯談など言ふものではないと、常々からたしなめられてゐましたから、さうも言へませんでした。で、雲山は金二駄を身の代として、めでたく京極家に引きとられました。

京極安知は、気のくさくさするときには、いつも雲山を二重箱の中から取り出しました。そして、「利休がこれを見て、結構至極ぢやと言つたさうな」と、口のなかで呟きながら、幾度か見直し、見直ししてゐると、心はおのづとこんな名器を秘蔵してゐる誇りに満たされて、言はうやうのない安慰を覚えるのでした。

が、こんなことを繰り返してゐるうちに、安知は不思議なことを発見しました。それは茶入の割れ目があまりぞんざいに継がれて、破片と破片とが互ひに入れ違ひになつてゐるところのあるのが、どうも気になつ

てならないといふことでした。
「その無雑作なのがいい、茶道の極意にかなつてゐるところぢや」
安知は世間の評判を言葉通りに胸のなかで繰り返してみました。しかし、これまで長い間いろんな名器から訓練せられた彼の趣味と鑑識とは、さういふ口の下からむつくりと頭を持ち上げて、
「さうかと言つて、この疵が……」
と強く不服を唱へました。そして入れ違ひになつてゐるその破片を、も一度正しく継ぎ直したなら、茶入はもつと見栄えがするやうになるだらうと考へました。

安知は思ひあまつて、自分の茶道の師範役である小堀遠州に相談を持ちかけました。

遠州は雲山を取り上げて、仔細に見直しました。

「京極侯のお言葉には、いかにももつともな節がある。さりながら……」

遠州はその瞬間、

「利休が結構至極ぢやと言つたさうな」

といふ世間の言伝へを思ひ出しました。そして腑に落ちない節はありながら、古い宗匠の言ひ遺した言葉は、そのままに立てておいたはうが無難であると思ひました。

「この茶入は、継ぎ目の合はぬところこそ、利休にも面白がられ、世間にも取り囃（はや）されたので、どうかこのまま大事に残しおかるるやうに」

遠州はかう言つて返事をしました。

五

遠州は間もなく亡くなりました。

寂しい、灰色の死の国をさまよつてゐるうちに、遠州はゆくりなくも大樹のかげで一人の老人を見かけました。粒桐（つぶきり）の紋の小袖に八徳（はつとく）を着、角（つの）頭巾を右へなげ、

尻切れをはき、杖をついて遠見をしてゐるらしいその姿は、遠州をしてすぐに宗匠利休を思はせました。そのむかし、利休自身の手で大徳寺の山門の上に置かれたのを、太閤の命令で船岡山に投げ捨てられたこの茶人の木像を、遠州は一、二度見かけたことがありました。

「これは、これは、利休宗匠でいらせられますか」

遠州は自分の工風（くふう）した遠州流のものごしで叮嚀（ていねい）に挨拶しました。

「あんたはどなたかな」

利休は悲しさうな眼をしよぼしよぼさせて訊きまし

た。

「私は小堀政一と申して、宗匠の流れを汲む茶人の一人でございます」

「ほう、茶をやられるか。それは奇特なことぢやな」

利休はなつかしさうに言つて、生前に茶器を鑑定(めきき)した時のやうな眼つきをして、しげしげと遠州の顔を見ました。

　その眼つきを見ると、遠州はふとあることを思ひ出しましたので、顔を老人の耳にすりつけるやうにして言ひました。

「宗匠、ここでお目にかかりましたのを御縁に、ちよ

つとしたことをお訊ね申したいと思ひますが……」

「何か訊ねたいといはつしやるか」

利休は、老人が年下のものに何か訊かれる折のやうに、意地悪く気取つて見せましたが、それは気の毒なほど弱々しいものでした。

「はい。お伺ひしたいのは、実はあの雲山のことですが、……」

「雲山？」老人はその名前がどうしても飲み込めないやうに訊き返しました。「雲山といふとどなたのことかな」

遠州はちよつと笑ひ顔を見せました。

「雲山と申しますのは、肩衝の名前です」

「肩衝？　肩衝といふと――」老人の寂しい顔に一脈の火が点ぜられました。言葉にも何となく元気がありました。「太閤御秘蔵の北野肩衝、徳川家の初花肩衝、そのほか肩衝にはいろいろあるが、雲山といふのは一向覚えがない」

遠州はもどかしさうに声を高めました。

「雲山と申しますのは、以前堺衆が秘蔵してゐたのを、宗匠の御挨拶がなかつたばかりに五徳に叩きつけて割りました……」

老人はやつと記憶を取り返しました。

「さう、さう。そんなこともあるにはあつたやうぢやな。しかし、そんなことを訊いてどうしなさるのぢや」

遠州は言葉を次ぎました。

「その後、茶入が素人の手で無雑作に継がれたのを御覧になつて、宗匠がこれでこそ結構至極と、その肩衝をお賞めなさいました」

「いや、違ふ。それは違ふ」老人は樹の枝のやうな手を振りながら、遠州の言葉を抑へました。「わしが賞めたのは、千金にも代へ難いその誇りと執着とを、茶器とともに叩き割つた持主のほがらかな心の持ち方ぢや。ただそれだけの話ぢや」

「それでは、茶入をお賞めになつたのぢや……」遠州は呆気にとられて、老人の顔を見つめました。

「さうとも。さうとも。賞めたのは、ただその心持ばかりぢや」

老人はきつぱりと言ひ切りました。

それを聞くと、遠州はすぐにあの茶入に対する世間の評判を思ひ出しました。今の持主の京極安知が彼に相談したことを思ひ出しました。そしてそれに対する自分の返事をそつと思ひ出して、覚えず顔を赤らめました。

老人はそれには一向気がつかない容子でした。

〔昭和2年刊『猫の微笑』〕

底本：「泣菫随筆」冨山房百科文庫43、冨山房
　　１９９３（平成５）年４月24日第1刷発行
　　１９９４（平成６）年７月20日第2刷発行
入力：林　幸雄
校正：門田裕志
２００３年3月24日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。